『人文学報』 第 98 号（2009年 12 月）
（京都大学人文科学研究所）

多数性としてのゲスト

――北インド・ダラムサラを事例に――

山 本 達 也*

1，は じ め に

1－1　本稿の目的

本稿は，北インド・ダラムサラ[1)]を訪れる観光客たちの語りや実践に注目し，インタビューや会話などから集められた事例を元に，観光客の多様な関心，動機などを記述・考察することで，旧来の観光研究においても，特に真正性に関する議論に見られる，「観光客とはこういうものだ」「だからこのように行動する」というアプリオリに設定された決定論的アプローチによる主体理解を乗り越えることを目的とする[2)]。ゲストとは，「～である」というような図式で一義的に理解しうる存在ではなく，極めてさまざまな関心から観光に臨んでいる多数的な存在である。そして，また，ゲストがある時はＡという枠組みで見ていても，時に応じてＢという枠組みで物を見るようになりうる，ということを提示する。

1－2　先行研究

本稿は，観光人類学における真正性の議論に関する一考察である。これまでこの分野で議論をおこなってきた論者として，ブーアスティン［Boorstin 1961］，マッカネル［MacCannel 1973, 2001］，アーリ［1995］，コーエン［1998］，ワン［Wang 1999］，橋本［1999，2003］，ブルーナー［2007］などが挙げられる。以下，その議論を追ってみよう。

ブーアスティン［Boorstin 1961］は，観光における「擬似イベント」説の提唱者である。ブーアスティンによれば，観光客とは，擬似イベントを消費する存在であるという。大衆によって構成される観光客に提示されるものは「念入りに作られた間接的経験」であり，本物を追及する知識人としての個人旅行者と異なり，観光客は「空気同様ただである本物があるまさ

---

* やまもと たつや　国立民族学博物学　外来研究員

にその場所で人工の生産物を消費する」[Boorstin 1961 : 99]。つまり，観光客とは，表面的で人為的なもの（＝偽物）を享受する受身的存在であり，本物を求める積極的存在としての旅行者とは異なるものとして描かれている[3)]。そして，観光客のこうした受身の姿勢が，現地の本来の状況とは関係ない見世物をさらに作り出していくことになっていくという。擬似イベントとは，現地の文脈とは本来関係のない，偽物の観光対象，とまとめることができるだろう。ブーアスティン以降の議論はこの擬似イベント概念に大なり小なり依拠することになる。

観光人類学に大きな影響を与えたマッカネル［MacCannel 1973］は，モダニティの構造を見るためのレンズとして観光客を考察する。その上で，マッカネルは，西洋にはない本物の文化を，日常から離れた，どこか他の時空間で消費したがるものとして観光客を定義する。こういった観光客は，現地人の一員になることを望み［MacCannell 1973 : 197］，真正な経験を求めて旅に出る［MacCannell 1973 : 199］。「観光客は，真正性を求めているのだ」［MacCannell 1973 : 208］。彼曰く，観光客は表面的な観光旅行ではなく，舞台の裏側を見たがる存在である。マッカネルは，裏側を見られることで生活を侵害されたくない現地の人々が，観光において，表と裏の多層的な提示をなすことを主張し，それを「演出された真正性」と名づけている。観光客たちは，この多層性の中で真正性の経験を得ることを追求する。

社会学者であるアーリ［1995］は，近代を再考する際に観光という事象を取りあげる。アーリは，観光を，労働と対比される余暇においてなされる行為である，と位置づけ，観光を通じて，「正常な社会」で何が生起しているかを理解しようとする［アーリ 1995：4］。その中で中心概念となるのが「まなざし」である。フーコーが『臨床医学の誕生』で用いたまなざし概念を，アーリは観光にも向けられるものであるとして，以下のように説明する。「まなざしは社会的に構造化され組織化されて」［アーリ 1995：2］おり，「社会体験とか社会意識の非観光的形態との関係性から構成されていく」［アーリ 1995：3］ものである。観光という「体験の一部は，日常から離れた異なる景色，風景，町並みなどにたいしてまなざしもしくは視線を投げかけること」［アーリ 1995：2］である。「まなざしというのは記号を通して構築される。そして観光は記号の集積である」［アーリ 1995：6］。まなざしの対象は，労働と対比されるもの，自分たちが日常取り囲まれているものとは異なった風景である。観光客は，このまなざしを通して，記号の集積である観光対象を消費する存在となる。

メディアなどを媒介にしたさまざまな記号の集積として構築主義的に観光をとらえるアーリは，観光事象に対して，そもそも本物／偽物というアプリオリな区分を立てていない。そのため，本物の探求を観光概念の根底に置く議論を正しくないと指摘する［アーリ 1995：20］。たとえば，以下のようにアーリは述べている。「私たちが本物として把握する対象を探求するというのはここで重要な要素であるが，それは，日常の体験と，ある意味で，対比的だというだけの理由からなのである」［アーリ 1995：20］。そして，現在，大衆観光以降のポスト・

ツーリストたちは，模造品と戯れ，真正性を疑うアンチ・アウラの姿勢をとるとする［アーリ 1995： 180－183］。同様に，別の場所でアーリは以下のように述べる。「『真正性の追求』は現代の観光を説明するにはあまりにも単純な基盤である」［Urry 1992: 51］。このように，真正性の議論を放棄したかに見えるアーリだが，観光客は真正性を疑うアンチ・アウラの姿勢をとる，と定式化してしまったことで，またしてもアプリオリに観光客の主体像を作り上げてしまった。

こうした真正性概念に関する議論に，複層性をもたらす議論も登場する。ワン［Wang 1999］は，旧来の議論で前提とされてきた真正性概念では，たくさんの観光客の経験や動機を説明できないと主張する。観光客の経験に沿った議論を展開するために，ワンは真正性概念を再考し，客観的真正性，構築的真正性，存在論的真正性に三分割する。最初に述べられる二つの真正性は，対象が本物かどうかに関わる議論である。客観的真正性とは，オリジナルなものの真正性であり，博物館における慣用で捉えられるものである。これにまつわる真正性の経験は，対象を真正なものであると認識することに起因する［Wang 1999: 352］。しかし，この立場は，専門家や知識人が，対象を真正か否か明白に切り分けようとする立場であり，真正性が揺れ動く側面を考察できない。一方，構築的真正性は，対象が客観的に計量可能な規準ではなく社会的な構築の結果真正性が生じたとする立場である。観光客とは，客観的な真正性ではなく，象徴によって構成された真正性を追及する，というのがこの立場である［Wang 1999: 356］。ここには，ポストモダン的なシニカルな視点も入ってくる。ポストモダニストは対象の真正性を放棄し，非真正性を対象に追求しさえする［Wang 1999: 359］。これにはアーリの議論が該当するであろう。

対象が真正であろうとなかろうと楽しむようなポストモダニストの態度を受けて，ワンは存在論的真正性を採用することを提唱する。存在論的真正性は，観光活動によって達成される，潜在的な存在の状態である。これは，本人が真に楽しむことができれば真正性が達成される，という立場であり，対象が真正かどうかということにはほぼ関係を持たない立場である。そのため，本人たちが楽しければ，対象が非真正なものであろうとも，存在論的な真正性を生み出す，ということになる［Wang 1999: 359］。この文脈で大事なのは，個人，もしくは集団でなされる主観的自己実現である，という事ができるだろう。ここでは，楽しむ，という観光客による快楽の享受が真正性をもたらすものである，とされている。

日本において，真正性の議論に向き合っている研究者として橋本の議論［1999, 2003］が挙げられる。橋本は，観光の研究に真正性を持ち込むことそのものを批判的にとらえる[4]。橋本によると，「観光客は『真正性』を求めているのではない。『真正性』の有無に関係なく，ただ『よく知られているもの』を求めている」のであり，「『真正』な文化を求めるのは，地元の『文化』にアイデンティティのよりどころを求める人々であり，決して観光客ではないことを

強調」する［橋本 2003：58－59］。「極論を言えば，観光者は現地の文化・社会・自然を『理解』するためにやってくるのではない。『見世物』としての文化・自然を楽しみにやってくるのである」［橋本 1999：223］。このスタンスは，対象が本物であろうとなかろうと，自己充足できればそれでよい，というワンの存在論的真正性の議論と非常に類似したものである。また，「よく知られているものを求める」という点では，アーリのまなざしの議論との類似を指摘することも可能である。

これに加え，橋本は政治的領域などから観光を相対化する必要を説く。観光において権力を見る立場に対して，こういった権力性は観光固有の問題ではなく，観光研究者が，政治・経済的状況が観光の場面にも反映されているにすぎない，という「距離感」を持つことを橋本は提唱する［橋本 1999：114－115］。橋本の立場は，あくまで，「観光」という理念的な対象を分析対象とすることを志向するものであると言えるだろう。

真正性に関する議論の道筋を作ったマッカネルは，新たな方向に目を向ける［2001］。それは，観光研究について回る決定論的アプローチへの批判である。アーリの業績を評価しつつ，マッカネルはその決定論にたいして批判を提示する。まず，労働と余暇を対比したことで，余暇に属する観光を非日常的なものとしたアーリは，退屈な日常を対象に向けられる基準として設定した結果，まなざしが向けられる対象を狭めてしまっているというものである［MacCannell 2001：26］。そして，制度や商業化された観光実践によってすえつけられたものとしてまなざしを一面的（表面的）なものと捉えてしまった［MacCannell 2001：30］。マッカネルは，見ることと信じることを一致させてしまう決定論に対して，単一の観光のまなざしなどない，と主張する。そして，見ることと信じることが一致しないまなざしを「第二のまなざし」と呼び，それはリアルなもの（the real）を一瞥する機会を開くかもしれないような予測不可能な対象や出来事を捜し求めるものであるとする［MacCannell 2001：36］。マッカネルの議論においては，従来の彼の議論同様，捜し求められる出来事の裏側としてリアルなものが設定されている。この現実は，真正性の再来と考えることもできるであろう。

1－3　問題の所在

ここまで，旧来の議論を駆け足でレヴューしてきたが，上記の議論に共通するものとして，社会的文脈に着目せず，一般的に「観光客とは～である」とする概念規定が挙げられよう。論者それぞれの主張に差異はあるものの，大まかに言って，観光客を「真正性を追及するもの」とした議論（マッカネル，ワン），「観光客とは真正性を追及しないものである」と設定した議論（ブーアスティン，アーリ，橋本）に二分できる。だが，ここで二分された議論は結局コインの表裏でしかない。これらの主張は概念と現実の同一性を要求し，そこからもれるものを排除することになり，多かれ少なかれ決定論的になってしまう。つまり，これらの定義からはなれた発

言や行動をする観光客は，先の議論においては観光客として考察されることがないのである。

真正性を巡った観光客の位置づけを分析するため考えだされたコーエンによる観光客の類型の提示[5]［1998］も，異なった点で問題をはらんでいる。というのも，この類型以外の在り方をコーエンの図式では説明できないからだ。この類型の間を行き来する可能性についてはコーエン自身が述べているが，真正性がどこかにある，という議論的前提の上でなされた類型化では，真正性があったりなかったりする状況を考えることは不可能だろう。

こういった議論のなかで，ブルーナー［2007］の指摘は突出している。彼は，真正性とは権力の問題であり［2007：224］，誰が追求しているのかという問題である［2007：243］と位置づける。そこでは，真正性とは「闘い」［2007：232］，「社会的プロセス」［2007：243］である。彼の関心は，真正かそうでないかの二分法を追求することではなく，そのさまざまな意味を社会的実践の中で理解することである［2007：226］。その中に観光客も巻きこまれる。ブルーナーは，観光客は真正性を求めるものだとも求めないものだとも言わない。観光客とは，「プロデューサーのメッセージをただ受容するのではなく，解釈し，しばし疑うという，能動的な自己の働きをもつ」存在であり，提示された真正性にたいし〈疑いのまなざし〉を向ける存在であるという［2007：141］。そういった観光客は一枚岩ではなく，自分たちにとって意味のある過去を構築し，自分たちの生活や経験に結びつけていく［2007：247］。観光客は，単なる観光客であることもあれば，時に事象をまなざすフレームを与える解釈者になったりする存在であり，役割を転換する。「観光客は変化に富んだ存在である。観光客であることは固定された地位ではなく，創られ演じられる役割なのである」［2007：145］。遠藤によるブルーナーの簡潔なまとめを引用すれば，以下のようになる。「オーセンティシティは存在するのではなく，観光地というテクストをいかに『読み解いている』のかという人々の実践活動の中で絶えず構築されるのである」［遠藤 2003：208］。そして，ブルーナーはきわめて重要な指摘を以下の一文で行なっている。「1人をとってみても，その1回きりの訪問においてでさえ，主観性や動機は変化するのである」［2007：248］。つまり，観光客という主体は，状況に応じて変化する存在であることがここで示されている。筆者は，こういったブルーナーの主張に大まかには同意する。

とはいえ，ブルーナーのこの指摘は，あくまで役割の観点からなされる指摘であり，「能動的」に疑う観光客，という視点に留まっているのではないか。筆者は，ここでの「1人をとってみても，その1回きりの訪問においてでさえ，主観性や動機は変化するのである」という指摘を，むしろ，出来事との出会いによって，意図せずとも観光客の視点に変化が生じてしまう，という，「出来事における被曝性」を考える手立てとしたい。本稿が扱う事例の中には，その被曝性が表れているものがあるだろう。

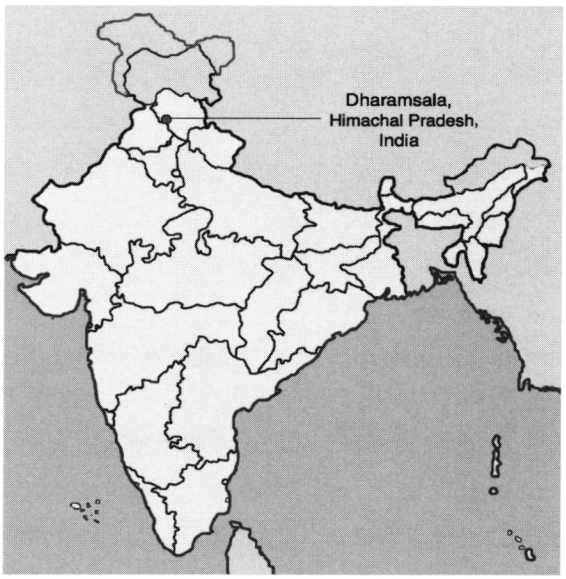
本稿は，チベット難民が居住するダラムサラという町を訪れる観光客の調査を事例に，上記

の議論が設定する観光客という枠組みを再考する。それによって，観光客によってなされるさまざまな状況における実践や発話から，上記の「観光客は○○である」というような定義の不毛さを明らかにする。真正性を求める者，求めない者の両者が存在してしかるべきであるし，また，一つの事例が提示するように，真正性に対する個人の発話自体一貫したものではなく，状況に応じて変わってくるのだ。本稿の議論は，いわば，真正性の議論の前段階において説定されてきた，観光客とはいかなる存在か，という自明の前提を問い直すものである。

2．調査地概況

2－1　ダラムサラについて

本稿が調査対象としたのは，北インド，ヒマーチャル・プラデーシュ州の観光地，ダラムサラである[6]。デリーからの交通は，直通バスだと12時間程度，列車で最寄の駅まで12時間，そこからタクシーやバスで3～4時間といったところである。2001年に実施されたインド政府人口統計によると，ダラムサラには19,304人の人々が暮らしているという[7]。ダラムサラは大きく二つの地区に分けることができる。コトワリ・バザール（Kotwari Bazar）を中心として商店が立ち並び，政府運営の大きなバス・スタンドがあるロウワー・ダラムサラ，そして，インドがイギリスの植民地下に置かれていたころから避暑地として活用され，現在ではチベット



ダラムサラの位置図[8]

難民が多く生活し，チベット仏教寺院やシヴァ寺院があるアッパー・ダラムサラである。多くの観光客が訪れるのは後者である。観光客について記述する本稿が対象にするのはこのアッパー・ダラムサラである。

アッパー・ダラムサラも大まかに四分割することができる。まず，バス停に面し，商店やゲストハウスが立ち並び，チベット人が多く居住しているマクロード・ガンジ，シヴァ寺院やそれを取りまくインド人集落バグスナース（Bagsu Nath），バグスナースからさらに山側にある静かなインド人集落ダラムコット（Dharamkot），チベット難民のための学校 TCV（Tibetan Children Village）近郊にあるナディ（Naddi）である。これに加えて，アッパー・ダラムサラとロウワー・ダラムサラの中間あたりに，チベット亡命政府の中枢が集まるガンチェン・キション（Gangchen Kyishong）という地域がある。

多くの人が行きかう，マクロード・カンジ

現在，アッパー・ダラムサラには，地元民であるインド人牧蓄民ガッディ（Gaddi），チベットから亡命してきたチベット難民たちに加え，インド各地からやってきたインド人，ネパールから出稼ぎにやってきているネパール人などがいる。それに加え，各地から観光客がやってくる。インド国内はもとより，海外からもかなりの数の観光客がやってきている。特に，1989 年にダライ・ラマ 14 世がノーベル平和賞を受賞し，1991 年に欧米諸国で展開された国際チベット年で脚光を浴びてからというもの，観光客は増加する一方である。マクロード・ガンジの観光案内所で問い合わせてみたところ，年間 20,000 人程度の観光客がこの小さな町にやっ

てきているのではないか，という。

ダラムサラは避暑地と言うこともあって，季節ごとに観光客の数が変動している。ピークは，チベットの旧正月（Losar）がある2月から4月ごろであるが，雨期前の5月から6月や，雨期後の10月から11月は過ごしやすく，多くの観光客が訪れる。それに対し，雨期は人が出ていくシーズンである。ダラムサラの雨量は多く，土砂崩れも頻発し，これといったイベントもないため，ダラムサラを出て行く人々が多い。また，冬季の寒さはかなりのものなので，ダラムサラに居ついていた観光客たちも南インドのほうへ移動することが多い。

2－2　メディアによるダラムサラに関する言説

本節は，ダラムサラに関するガイドブックやインターネットなどでの紹介を見ることで，観光地としてどのような言説が展開されているかを観ていくことにする。

まず，筆者の手元にあるボロボロに擦りきれた一冊のガイドブック『地球の歩き方　インド』［地球の歩き方編集室　2006］を見てみよう。ダラムサラのページを開いてみると，そこにはチベット人僧侶の写真が，これでもか，というくらい前面に押しだされている。ダラムサラは「クル，マナーリーの西にあるダラムシャーラーは，万年雪をいただくヒマーラヤの景観もさることながら，チベット文化の中心地として世界中から旅人を集めている」「いわば亡命チベット政府の拠点でもあり，ダライ・ラマに従ってチベットを去った十数万のチベット難民の精神的な支えにもなっている地だ」という［地球の歩き方編集室 2006：278］。このガイドブックの中ではチベット難民，特にダライ・ラマに関する記述が大半を占めている。ダラムサラは，「チベット文化の中心地」なのだから，それも不思議ではない。しかし，ここで表象されているチベット文化とは，チベット仏教とイコール関係である[9]。その中で見所として挙げられているのは，「ダライ・ラマ法主公邸とチベット寺院」を筆頭に，バグスナースの「シヴァ寺院と滝」，ナディ方面の「ダル湖」，トレッキング・ポイントとして「トリウンド」である。最初のものはチベット関連のものであるのに対し，残りの三つはヒンドゥー教の寺院と聖地，インド人集落の近くにある憩いの場，そしてトレッキング・ポイントという点で，このガイドブックが記述するような「チベット文化の中心地」というものからは外れている。つまり，このガイドブックが「チベット文化の中心地」として取りあげたいのは，「ダライ・ラマ法主公邸とチベット寺院」なのである。このガイドブックが考えるチベット文化とは，チベット仏教に関するものなのである。読者からの声としては，「この町では，何よりもチベット人のよさに触れることができた。道が悪いためリクシャーが少なく，インドに疲れた方にお勧め」というものや，「にぎやかなマクロード・ガンジを避けて」バグスナースを勧める投書があった。ちなみに，ロウワー・ダラムサラに関する紹介はされていない。

次に，インド旅行者の間では半ばバイブルと化した感のあるロンリー・プラネットを見てみ

よう。1000ページを超えるその紙幅はさすがである，ロンリー・プラネットは「ダラムサラ（ダラムシャーラーと発音される）は，ダライ・ラマの住処としてもっともよく知られている。ヒマラヤのダウラダール山系にある古い避暑地であるその町は，実際のところ，二つの部分に分けられる」[Lonely Planet 2007 : 263] と断りを入れたうえで，ダラムサラという記述はあくまでロウワー・ダラムサラにのみ用い，アッパー・ダラムサラにはマクロード・ガンジの表記を用いている[10)]。

この本では，マクロード・ガンジは以下のように紹介されている。「マクロード・ガンジはチベット亡命政府の本部やダライ・ラマの住居であるのと同様，大半の旅行者にとっての住処でもある。ここには，友好的なチベット人僧侶，低予算のホテル，トレッキング会社，西洋料理，映画，チベットの土産物を売っている店があふれかえるほどある」[Lonely Planet 2007 : 263]。「現在，この町はインド的というより，チベット的である」[Lonely Planet 2007 : 264] という記述が示す通り，このガイドブックが記述するのは，チベット仏教を中心とした観光地紹介である。面白いのは，マクロード・ガンジに関して言えば，このガイドブックはインド的なものをほとんど抹消しているところにある。たとえば，シヴァ寺院を観光ポイントとして取りあげた『地球の歩き方』とは異なり，マクロード・ガンジ近辺の見どころとして挙げられたバグスに関する記述の中で，「小さなシヴァ寺院」[Lonely Planet 2007 : 272] として取りあげられているにすぎない。

インターネットでは，無料百科事典サイト「ウィキペディア」にもダラムサラに関する記述がある[11)]。ここには，「ダラムサラのほうによりピュアなかたちでのチベット文化が保存されていると見ることもできる」という記述が見られる。

3　観光客たちによる言説

前章で見たように，観光に関して，ダラムサラにはさまざまな言説が張りついている。確かに，以下の事例のいくつかはこういった観光に関する言説をなぞっている。しかし，それからはみ出す性質をもつものも存在する。本章では，観光客が実際にどのようにダラムサラという場所を経験し，語っているか，事例を通して描き出すこととする。

3－1　真正性を享受したゲストの事例

本節では，真正性を期待してダラムサラにやってきたゲストのなかでも，その真正性に対する期待や枠組みを失うことなく保持できた二つの事例を見てみたい。ここで取り上げるのは，日本人女性とスイス在住チベット人女性である。彼女たちは，それぞれの出発地から持ち込んだ真正性の図式を多かれ少なかれ最後まで持ち続けた人々である。

3－1－1　Aの場合

彼女はダラムサラでチベット難民との始めての出会いを経験した20代の日本人女性である。インドへはダラムサラ目当てでやってきたため，その他の地域には行っていない。ダラムサラへはチベット人やチベット文化とのふれあいを目的にやってきたという。インドにやってくる前，チベットに関するさまざまな本を読んでやってきた彼女だが，僧侶や民族服（以下チュバ）に身をつつんだお年寄りを見て，非常に興奮したようだった。

> ここに来る前に思ったとおりの人たち。いい人たちだし，インド人みたいにいちいち声をかけてこないから，過ごしやすい。お寺に行けば，お坊さんたちがお経を唱えてるし，チベットのギターみたいなのを町中で弾いてる人もいるし，本物のチベット文化が生きているな，って感じ。民族衣装も着ている人多いから，きれいだと思う。

> デリーと違って埃っぽくないし，人も少ないから過ごしやすい。雪山も見えるし，チベットの旗もあちこちにかかっているし，チベットみたい。

彼女は滞在中空いた時間でボランティアとして英語学校でチベット人に英語を教えていた。そこで知り合ったチベット人男性と行動を共にするようになり，彼女が滞在していたアッパー・ダラムサラやチベット寺院で多くの時間を過ごしたという。その後，彼と一緒にチュバを買いに行き，滞在中頻繁にそれを身にまとっていた。筆者が見送りに行った際，彼女はダラムサラでの滞在を「すごく満足した」と語っていた。

この女性は，ダラムサラやそこに住んでいるチベット人に，チベットという言葉が含み持っているイメージを投影し，それを「本物のチベット文化」という言葉で理解している。彼女は，ダラムサラでの観光体験において，チベットの真正性を享受した，と言えるだろう。

3－1－2　Bの事例

Bは，スイスに居住するチベット人である。彼女のダラムサラ訪問の目的は，「本物のチベット文化を体験すること」であった。

> 私の住むあたりでは，チベット語を話せる人があまりいない。私の弟に至っては，ほとんどチベット語が喋れない。また，普段見たり聴いたりするものもスイスやドイツのものが多い。私はチベットの伝統的な音楽が好きなので，ダラムサラに勉強しに来た。ここには本当のチベット文化が生きているから。スイスではチベット文化を勉強するのは難しい。やっぱりダラムサラで本物のチベット文化を体験することが一番早いと思った。

町の環境は思っていたのとは違った。デリーほどではないけど，やっぱりインドだな，と思った。チベット人も全員がチュバを着ているわけではないし。でも，本当のチベット文化は失われずにここに残っている，と感じた。来てよかったと思う。

彼女は，当時，筆者が練習生として所属していたチベット難民舞踊集団に練習生として参加し，筆者とともに2ヶ月ほどチベットの伝統的な楽器を練習した。筆者同様，寮に寄宿して朝から晩まで練習に明け暮れていた彼女は，「やっぱりうまくなるのは難しかった」と言いながらも，満足げにスイスに帰っていった。

3－2　真正性を享受できなかったゲストの事例

本節では，それぞれの出発地を出る際に真正性の図式をある程度持っていたが，それが旅のなかにおけるさまざまな出会いによって壊され，失われていった人々の事例を四つ取り上げる。

3－2－1　Cの場合

彼は，中国から旅をスタートした20代の日本人バックパッカーである。チベットにも行った事があり，インドを一周し，パキスタンの国境越えをする前にダラムサラに立ち寄った。彼がこの町に立ち寄ったのは，文化観光などといった何か特別な目的があったのではなく，あくまでも国境越え前の羽根休めであった。だが，彼が滞在したアッパー・ダラムサラはチベット難民が住人の多くを占めるため，チベットに行った事がある彼は，本土とダラムサラを比較して見ることが多いという。そのため，彼のまなざしは，主にチベット難民に向けられていたと言えるだろう。もともとチベットに対する一定のイメージを持っていた彼は，チベットで一度がっかりしているため，ダラムサラで見かけるチベット難民に対して免疫のようなものを持っていた。彼の語りを見てみよう。

チベット人に会う前に持っていたイメージは，文明とはかけ離れてましたね。ラサとかにも神秘的なイメージを持ってましたし。でも，ビルとかガンガン建ってたり，車走ってたりしてがっかりしましたね。まぁ，ここ（ダラムサラ）とは違うけど，ラサではみんな信仰心厚いなぁ，と思いましたね，若者も含めて。

（ダラムサラに来る前のイメージってどうでした？）

もっと静かなイメージでしたね。神秘的なイメージはなかったです。まぁ，実際来てみると，高原の避暑地，ですね。ここのチベット人はみんな楽しんでますね。本土より明るいイメージです。まぁ，暗そうとは思ってなかったですけど。ここの坊さんは坊さんぽくないですよね，本土と比べると。サッカーとか観てるじゃないですか。敬意を払おうとい

う気にはなれないですね。やっぱり，自分のイメージに近いのは，まだ本土ですよね。やっぱ，風景だと思うんですよね。

この語りからわかるのは，ある程度のイメージを持って彼はチベットに行き，そのイメージとチベットでの経験を持ってダラムサラにやってきた，ということである。彼がダラムサラのチベット難民や風景に向けるまなざしは，彼がチベットに訪れる以前から持っていたイメージと，チベットでの経験に依拠している，と言えるだろう。上の事例からは，彼がダラムサラで見た人々や風景を，それらの軸の中で比較し，評価していることがわかる。

また，彼はインドを一周した上でダラムサラにやってきている。そのため，インド人とダラムサラのチベット難民を比較するまなざしを持っている。

やっぱインド人って言ったら態度の悪さですよね。たとえば売店とかでね。インド人が一番態度悪いですね。つり銭投げられたら睨みかえしますもん。

（チベット人と比較したりとかします？）

ここだとしますね。余計鬱陶しく感じます。国境を別にすれば，インド最後の町がインドらしくない，ってのも変な気分ですが。

彼はチベットに対して一定のイメージを持っていたが，それがチベットで揺さぶられた。揺さぶられた結果できた新たなイメージを持ってダラムサラにやってきて，チベットとダラムサラを比較していた。僧侶についての彼の語りを参照すればわかるように，そこではダラムサラよりもチベットのほうが彼の望むものに近かった，ということが言える。

3－2－2　Dの場合

彼女は，後述するEの連れ合いで，一緒に旅して回っていたカナダ人女性である。旅に対して特に目的を持たず，気が向いたときに気の向くままにあちこちを転々としていたようだ。筆者の借りていたアパートの隣に，彼らも2週間ほど間借りして住んでいた。彼女の家族は旅好きだったそうで，小さい頃，すでにチベットを訪れ，ダラムサラにも何度か訪れていた。そのときの印象は，「オールド・ファッションで宗教的。いつも寺に行って，数珠を回している，というイメージ」だったと言う。今回のダラムサラ滞在は，彼女が提案したものだそうだ。だが，久しぶりに来てみると，今のアッパー・ダラムサラの住民や風景には変化を感じるという。

昔来たときと大きく変わった。もちろんそれは相手の年齢によって変わるけれど。お年寄りは信仰厚くて，今でも伝統的な衣装を着ている。でも，あまりにも多くの観光客を見

ているから，それも変わってきているかもね。たとえば，若いチベット人は現代的で，アメリカの若者みたい。バギー・ジーンズを履いたり。インド人よりも今っぽいと思う。町にしても，昔着たときはもっと小さくて，こんなにインターネット・カフェみたいな建物なんてなかったから。観光客が来て，変わったんだと思う。

（僧侶についてはどうですか？）

もっと信仰心が篤いと思ってたから，まさか町で買い物とかしいてるとは思わなかった。レストランに行ったり，携帯電話で話してたり。すごく楽しんでいる感じ。そんな宗教的だとは思えない。尼さんはそこまで酷くないかな。もう少し保守的だと思う。

彼女は，現在アッパー・ダラムサラでも盛んに喧伝されている菜食主義の奨励についても語っていた。

町ではチベット人たちが菜食を奨励しているけど，彼らの多くが楽しみとして肉を食べている感じ。もちろん中には気を使っている人もいるだろうけど。本当に，同情心に満ちた仏教を志向するなら，彼らは肉を食べるべきではないと思う。野菜がなかった本土とは状況が違うんだから。

そして，彼女は自らがこのように位置づけたチベット人とは対照的に，「ここのインド人はいい感じよね。頑張っている」と語っていた。この彼女の語りからは，チベット人よりもインド人を評価する姿勢を極めて容易に読み取れるだろう。彼女の思い描いていたイメージと，ダラムサラで彼女が見出した現実との乖離が，チベット難民へ向けられたまなざし，そして，ダラムサラでの観光において通常では前面に出てこないインド人へのまなざしを生み出すことになったのである。

3－2－3　Eの場合

Dの連れ合いである彼は，カナダでフリー・ジャーナリストをしている。彼は今回が初のダラムサラ体験で，筆者との日常的なやりとりの中で驚きをたびたび表明していた。以下，彼の語りには，筆者が情報提供した暴力事件の話題が彼の視点を変えてしまったことが散見される。

チベット人に会う前は，温和，精神的，内省的，礼儀正しさ，というイメージだった。倫理的というか禁欲的というか。でも，実際会ったり，話を聞いたりしていると，その多様性がわかってきた。多くの人々が西洋化されている。私は，もっと害されていないチベット文化を考えていた。僧侶が携帯電話や高そうな時計を持っているのには驚いた。ま

た，チベット人の間で暴力事件があるなんて思ってなかった。若者のあり方は，美的倫理的なものとは正反対。アメリカ化していると思う。インド人とは比較にならないくらい。町にしても，ガイドブックである程度予測はしていたけど，こんな西洋化しているとは思ってなかった。町全体が僧院だったり，崖があったりと，もっとチベット的なものを想像していた。イメージからは程遠い。でも，たしかにチベット的であろうとはしている。本土も同じだと思う。どっちにしても何らかの影響下にあるから。

また，Cと同様，彼はチベット人よりもむしろ地元インド人の方へ目を向けている。

ここのインド人には，セーフティ・ネットのなさを感じる。チベット人にはさまざまなかたちで提供されているのに……。チベット人よりインド人のほうが貧しいんじゃないか。チベットのことに気を向けすぎて，インド人への対応がおろそかになっているんじゃないか，と感じる。チベット人よりもむしろインド人に共感を覚える。

インタビューの前後，彼らのチベット人に対する態度は悪化の一途をたどっていた。特に，アパートの大家が時折見せる横柄で金銭欲を前面に出した態度に彼らは非難の目をむけていた。このインタビューの数日後，彼らはインド人集落バグスナースへと引っ越し，インド人の生活にまなざしを向けていくことになった。彼らを取りまく人々は，チベット人からインド人へと変化した。

3-2-4　Fの場合

彼は，チベット仏教を勉強するためにこの町にやってきた日系人男性である。ダラムサラに来る前からチベット仏教書を読むなど，予備的な知識をつけていた。チベット仏教やチベット人へのイメージをふくらませ，きわめて真面目に勉強に取り組んでいた彼を待っていたこの町は，彼を唖然とさせることになる。

ここに来てチベット人の印象は大きく変わった。来る前に読んでいた仏教の本では，みんなが人々の精神を変えようとしてると思ったけど，ここの人たちがしている信仰はほとんど形だけのもの。自分を変えようとは思ってない。現状を維持できれば，って感じで，チベット人は怠け者に思える。学歴のあるチベット人もそういう人たちのことを怠け者だと言ってる。

のちにネパールに旅立つ彼が，直接的にチベット難民の町を体験したのは，この町が最初

だった。彼はチベット本土には行ったことがなかった。しかし，彼にはチベット難民の友人もいて，その大半が，チベットで長く時を過ごしてこの町にやってきた，いわゆる新難民であった。そのため，彼のチベットに対するイメージは，チベットから近年亡命してきた人々の語りから構成されていた。彼は，筆者にいつもこのように語っていた。

> やっぱり，チベット本土にいるチベット人こそが本当のチベット人だよ。ここにいる人たちは本物じゃない。

彼にとって，ダラムサラは真のチベット人や文化に出会える場所ではなかった。それは，彼にとってまだ見ぬ地であるチベット本土に担保されている。

3－3　真正性を求めていないゲストの事例

本節では，そもそもチベット人が多く住むダラムサラという町に対して真正性を求めていない二つの事例を紹介する。これら二つの事例は，滞在目的にチベットに関するものが含まれておらず，自分のやりたいものがはっきりしているのが特徴である。

3－3－1　Gの場合

Gは，バックパッカーとして各地を旅して回った経験を経て，ダラムコットのヴィッパサナー瞑想センターを目指してこの町にやってきた。滞在先はマクロード・ガンジの外れに構えていたものの，彼はチベット人，インド人双方と積極的に相互交流をしていたわけではない。ちなみに，彼は瞑想センターで瞑想の訓練をするために，定期的にダラムサラにやってくる。

> チベット人って言ったって，いろいろいるからね。みんなスピリチュアルなわけでもないだろうし，第一，こうやって人目につく奴なんて，自分たちと大して変わらないでしょう。インド人もチベット人も，道端で，両方馬鹿なことしてる（笑）。みんな俗っぽいんじゃない？　チベット語もヒンドゥー語も無理して勉強しようとか思わない。英語でいいじゃない。文化とか興味ないし。俺は瞑想だけやってればいいよ。

彼のように，チベット文化に興味を持たず，瞑想だけを目当てに来る観光客は意外といる。彼らはダラムサラで催されるチベットを中心としたイベントにはほとんど参加せず，瞑想が一段落したらダラムサラを離れることが多い。

3－3－2　Hの場合

Hは今回事例として取りあげる中で唯一のインド人観光客である。彼がダラムサラにやってきた目的は，日照りが続くパンジャブ地方からの避暑であった。チベット寺院に参拝したとき，たまたま寺院をぶらついていた筆者に彼が話しかけてきたことから会話することになった。

ここへ来たのは，パンジャブ州とヒマーチャル・プラデーシュ州は隣なので，来やすかったから。パンジャブ州は暑いので，避暑地に来たいと思っていた。また，チベット寺院がどういうものかを見たかった。特に信仰目的ではない。あと，滝があるらしいので，そこに行ってみたい。

寺院は，アムリトサルの黄金寺院のほうが豪華だと思う。それでも，チベット人の信仰が見れて興味深かった。チベット人やチベット文化のことはほとんど知らなかったから。

数日間の滞在で彼が考えているのは，寺院と滝へ行くことだという。ダラムコットやナディは選択肢に入っていなかった。ちなみに，筆者が会話したH以外のインド人観光客がダラムサラにやってくる目的は，H同様に避暑が大半を占めており，避暑目当てで来た全員が行き先として寺と滝のみを挙げた。また，数人のインド人観光客が，トレッキングのためにやってきていたということを付言しておく。

3－4　真正性に関する視点が移行した事例

本節では，前節で取りあげた人々同様，ダラムサラに何の真正性も期待せずにやってきたにもかかわらず，出来事に巻きこまれるなかで，突如真正性の図式に襲われたカップルの事例を紹介する。

3－4－1　カップルI，Jの場合

彼らは，インド中のスピリチュアルな施設を回ってアッパー・ダラムサラにやってきた。ここにやってきた理由は，「空気がきれいなところで修業したいから」ということであった。彼らはチベット難民のことをもちろん知っていたが，まったく興味を示していなかった。修業のこともあってか，Iがヒンドゥー語をしゃべれるため，ほとんどいつも地元のインド人たちと行動していた。彼らは最初こそマクロード・ガンジ近辺に住んでいたものの，後述の事件のあとしばらくしてバグスナース，そしてダラムコットを転々とした。

チベット人？　興味ないなぁ。別にチベット人目当てでここに来たわけでもないし，特に文化や寺社仏閣に興味があるわけでもないからね。ここに来たのは，ダラムサラがスピ

リチュアル・マーケットだから。ヨガに始まり，瞑想，マッサージと，やりたいことが何でも揃うしね。だから，修業の場としかとらえていないよ。

このように，来た当初，彼らはチベット人や文化に対してまったく興味を抱いていなかった。しかし，後日レストランで肉食するチベット僧侶を見たことがきっかけで，彼の態度は一変することになる。

今日お茶を飲みに行ったら，僧侶が肉を食べていた。チベット仏教は生き物への慈悲を説く宗教だろう。生命に対する慈悲を説く人間が肉を食べるなんて言語道断だ。本物の僧侶は肉なんて食べず菜食であるべきだ[12)]。

何の修業かよくわからないが，修業に励む彼は，肉を食べない。彼は，その信条に反する行為を同じように修業する僧侶がしていたことに我慢ならなかったのだろう。

このように修業熱心な彼に対して，同伴のＪは，行動はともにするものの，修業には打ち込まず，マッサージの勉強をしながら日々を過ごしていた。彼女も特にチベット人やチベット文化に対して興味を持ってきたわけではなかったため，チベット人と普段からつきあうわけでもなく，気ままにふるまっていた。しかし，ある日，チベット人男性から執拗なアプローチを受け，それを断ったところ，数日後にありもしない噂が流される，という事件があった。それを知った彼女は，うんざりしたようにこう語った。

チベット人は，仏教徒だから謙虚でいい人たちだと思っていたけど，しつこく絡まれるわ，変な噂は流されるわで踏んだりけったり。こんなことになるとは思ってなかった。

静かなところだと聞いていたけど，うるさい人もいて，そんなにいいところでもない。イメージとぜんぜん違う。

このカップルに共通しているのは，当初，真正性の図式を提示していなかったにもかかわらず，彼らがチベット人とのかかわりに巻きこまれるや否や，真正性の図式が顔を出してきた，ということである。ここでは，真正性は初めから提示されたものではなく，出来事との関係のなかで生じてきているのが分かる。

このインタビューの後，マクロード・ガンジを去った彼らは，インドのさまざまなスピリチュアル・マーケットを転々とすることになる。

4．考察とまとめ

4－1．考察

これまで，さまざまな観光客の語りを事例として見てきた。その内訳は，海外からの外国人観光客，避暑にやってきたインド人観光客，そして，海外からダラムサラにやってきたチベット人観光客であった。彼らは，彼らのおかれた様々な状況を反映した語りをダラムサラやチベット人，チベット文化へと向けていた。以下，一つずつ事例を分析していく。

Aは，ダラムサラ目当てでインドにやってきた。ガイドブックや本で仕入れた知識を持ったうえでチベット人やチベット文化に触れあっていた。彼女はダラムサラで生きるチベット人やチベット文化を「本物」として理解し，「思った通り」であった，と語っていた。彼女は，「真正性」を追求し，なおかつその「真正性」に触れることができた，という感覚を得てダラムサラを去って行った。この事例は，真正性を追求し，しかも堪能できた観光客の事例である，と言える。

また，スイス在住チベット人女性Bの事例も，スイスから彼女が持ち込んだ真正性の図式を保持できた事例であった。それに加え，この事例は，海外在住のチベット難民が，ダラムサラでの滞在をどのように消費するか，という話でもあった。彼女にとって，ダラムサラは真正性が根づいた場所であり，そこで彼女が経験したさまざまな出来事は，前もって彼女が持っていたイメージをそれほど損なわないものであった。「本物のチベット文化」が根づくダラムサラに彼女は満足し，帰国していった。ここでは，希求された真正性が見事に提供されている。

上記の二つの事例は，真正性を損なうことなくダラムサラを堪能できたものであった。それに対し，以下の事例は真正性を打ち砕かれた事例である。チベットを経由してダラムサラにやってきたCは，彼の思い描いていた「真正なるチベット」像をすでにチベットで砕かれていた。中国支配下で近代化したチベットは，彼の見たいものではなかったのである。しかし，ダラムサラで彼が見たものはそれ以上に彼のチベットに対するイメージからずれたものであった。両者の比較において，相対的にチベットのほうが彼を満足させるものであったということが彼の語りから窺える。ダラムサラでの経験は，真正性に対する彼の感覚を打ち砕いたチベット本土での経験を，より高いものとすることになってしまったのである。

DとEも，ダラムサラ在住のチベット難民に幻滅した人々であった。町での出来事や筆者との会話を経由したことで，彼らの真正性の図式は，大きく揺るがされることとなった。彼らは，自分たちが思い描いていた宗教的で信仰篤いチベット人像が裏切られたことを語っていた。ダラムサラで生活するチベット人を見て幻滅し，非難の対象とした彼らのまなざしは，ダラムサラにおいてあまり顧みられることのないインド人のほうへ向けられた。

真正性を希求しながらも，その思いを砕かれたのはFも同様である。チベット仏教を勉強

するためにダラムサラにやってきた彼は，ダラムサラで出会えるであろうチベット人やチベット文化に大きな期待を寄せていた。しかし，ダラムサラで彼が目にしたものは，彼が望んでいたものとは大きく異なっていた。彼にとってそれは，仏教的なチベット人，というイメージからはほど遠いものだったのだ。ダラムサラのチベット文化やチベット人に幻滅した彼は，友人のチベット人が語るチベット本土に彼が望む真正なるチベット文化を担保し，チベットへの憧れを語っていた。

上記の四つの事例が，当初持っていた真正性を打ち砕かれたものであるのに対し，チベット人の町ダラムサラに対してＧは全く真正性を期待していなかった。瞑想を目当てにしてやってきた彼は，チベット人がいるからダラムサラに来たわけではなく，あくまでスピリチュアル・マーケットとしてのダラムサラにやってきたのである。彼はチベット人にもインド人にも深入りせず，自分のやりたいことだけをやるためにダラムサラという地を消費しているのである。

真正性をはなから持ち込まず，自分が目的とするものを堪能する，というレベルでの消費は，インド人観光客Ｈにも見ることができる。彼は，ダラムサラをチベット人たちの住む町であるということは知っていたが，前もってあまりイメージを持たず，単に避暑地としてダラムサラを認識していた。彼にとってダラムサラ訪問は，灼熱の地パンジャブ地方からの一時的な逃避行にすぎない。消費の対象は，あくまで快適な気候である。真正性に基づいたイメージを持っていなかった彼の眼には，チベット人の信仰は興味深いものとして映ったようだが，それは，あくまで避暑の延長としてのものであった。

こういった事例の中で特に興味深いのは，ＩとＪの事例である。彼らは，宗教的なものに興味を示す人々の間ではスピリチュアル・マーケットとして名高いダラムサラに，なにがしかの修業をしにやってきたのである。当然のことながら，チベット難民には目もくれず，興味が全くない様子であった。現に，当初，彼らは，ダラムサラやチベット人に対し，なんの真正性も期待していない，という回答をしていた。しかし，ある出来事がきっかけで，「本当のチベット仏教は……」という語りが彼の口から出てきたのである。彼は，自らが望まない実践をしたチベット僧侶を非難する図式として真正性を持ちだしてきたのである。それは，言い換えると，肉を食べるチベット人僧侶を目撃したという出来事に曝されたＩに，当初彼が想定していなかったであろう真正性が突如襲ってきた，ということができるだろう。同様にＪも，チベット人に対するイメージや真正性などを全く語っていなかったにもかかわらず，チベット人男性との間に起こったいざこざを発端として，「イメージしていたものと全然違う」という語りをしていた。そのイメージとは，まさにチベット人に臨まれた真正性である。彼女においても，当初想定していなかった形で，出来事の中で真正性という図式が到来してきたのである。

以上のように，様々な観光客が様々な仕方でダラムサラを語り，消費している。ここに見え

るような観光客たちは，序章で取り上げた先行研究の多くが前提としていた観光客像では捉えられないものであった。観光客の中には，観光地に対し真正性を希求する者もいるし，そうではない者もいる。真正性の希求に失敗した者のなかには，真正性の図式を放棄した者もいれば，真正性を他の対象に担保した者もいる。こういった多様な観光客たちを十把一絡げに「真正性を追求する存在」「観光客は真正性など追及しない」などと語ることはできない。真正性を観光客が追求するか否かは，その観光客が何を消費したいか，ということと，観光地が置かれている文脈に大きく依存するものなのである。事例に見えるように，真正性という問いが観光地に投げかけられるか否かは，その観光客が何を求めてやってくるかに依存するし，真正性への希求が満たされたか否かについても，その観光客が何に満足を見出すかによる。そして，きわめて重要な事例として，真正性の希求を当初は有していなかった人が，状況によって真正性に関する語り口を持ち出すこともあった。むしろ，観光客とは，ＩとＪの事例のように，出来事の中で真正性の図式の出現や喪失を本人の意図や思惑を超えて経験する存在なのかもしれない。アドホックに視点が変化していった彼らのような人々を見たあとでは，真正性の有無をアプリオリに設定することは不可能である。こうして見ると，真正性を軸にゲストを定義づけようとしてきた旧来の諸研究は，観光客という主体に無理やり固定的な同一性を持ちこもうとするものであったと言えるだろう。

また，いわゆるホスト側も，社会的・政治的状況に応じて，真正性に関する語りを必要とするか否か，またどの程度必要とするか，が変わってくるだろう。ブルーナーの主張を換言すれば，真正性とはどこかにあったりなかったりするものではなく，対象や，それにかかわる状況によって創られたり放棄されたりするものなのである[13]。そういったプロセスに巻きこまれ，真正性を求めたり求めなかったりする観光客という存在を，アプリオリに真正性を追求する，しない，のどちらか片方に位置づけするということは不毛な作業である。重要なのは，観光客とは「何か」，を問うのではなく，現地において観光客が対象を「いかに」語り，振舞っているか，そして，出来事のなかで，彼らの言動がいかに変化していくか，に注目することなのである。

4－2．まとめ

本稿が目的としたのは，観光研究においてアプリオリに設定された観光客という主体の再考であった。本稿が提示した事例によれば，観光客とは，きわめて多彩な人々の呼称であり，その人がどういった視点から観光地を消費するかによって，真正なものを求めたり，求めなかったりする。中には，真正なものに興味がなかったにもかかわらず，とある出来事により真正性を語りだすような人もいるのである。このように，観光地でアドホックに行為する観光客という存在は，旧来の研究が前提してきた「真正性を求める観光客」「観光客は真正なものなど求

めていない」という二項対立には収まりきらないものなのである。

本稿が提示したのは観光客における真正性の問題である。しかし，「真正性は観光地において様々なアクターがやり取りする中で作られる」というブルーナーの指摘に従えば，いわゆるホスト側の分析も必要となるだろう。そのため，筆者は本稿の続編として，ホスト側における真正性の問題に取り組むつもりである。本稿は，筆者が考える観光人類学的研究の第一章である，と言えるだろう。

注

1） 本稿がダラムサラという形で言及するものは，特に指摘がなければアッパー・ダラムサラやあとに登場するロンリー・プラネットにおけるマクロード・ガンジと同義のものとして用いる。

2） ちなみに，観光研究においても，理論的に，ベンヤミンやセルトーの議論に依拠し，空間論的アプローチをとるものにはこういった決定論的な視点から逃れる動きが散見される。たとえば以下を参照［神田　2001］。だが，こういった観光研究は，理論的な進展はあるものの，具体例として描かれたものが少ないのが残念である。

3） 旅行者から観光客という形態上の堕落を指摘するこうしたブーアスティンの議論に対し，吉見は，こうした形態上の変化は「近代における民衆の身体感覚や娯楽の構造的な変化」［吉見 1996: 32］を反映したものである，と指摘する。ちなみに，ブーアスティンによって提唱された疑似イベント論は，ボードリヤール［1984］やエーコ［Eco 1986］らによって現代社会論として展開されていった。

4） 橋本の論集に寄稿している梅田も同様の視点を採っている［梅田 2003：104－106］。また，ゲストに対する橋本のこの姿勢は，2007年に行なわれた京都人類学研究会においても一貫していたことを付言しておく。

5） コーエンによると，観光経験は，「気晴らしモード」「レクリエーション・モード」，「経験モード」，「体験モード」，「実存モード」の五つに分けられる。最初のものに近ければ近いほど疑似的で人工的であり，後半に近ければ近いほど真正な体験であるという［コーエン 1998：39－40］。

6） ダラムサラの歴史などについての記述は山本［2009］を参照。

7） 以下を参照。http：//www.censusindia.net/

8） 以下のホームページより転載。http：//ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%80%E3%83%A9%E3%83%A0%E3%82%B7%E3%83%A3%E3%83%BC%E3%83%A9%E3%83%BC。

9） ちなみに，チベット寺院を写した写真において巡礼しているのは，俗人のチベット難民ではなく，インド人である。ここでは，僧侶ではないチベット人の姿が全く映しだされていないのが印象的である。

10） ちなみに，この本でのダラムサラの扱いは，以下のようなものである。「賑やかなコトワリ・バザールとカングラ芸術博物館をのぞけば，あなたをとどまるよう誘いかけるようなものはほとんどない。代わりに，ほとんどの人がマクロード・ガンジへと向かっていく。そこでは，チベット人の活動の大半が行われている」［Lonely Planet 2007：263］。

11） Wiki Travelの項目「ダラムサラ」を参照。http：//wikitravel.org/ja/%E3%83%80%E

3%83%A9%E3%83%A0%E3%82%B5%E3%83%A9。2009年2月1日閲覧。

12) ちなみに，筆者は僧侶が肉食をするのかどうかはっきりしたことは言えない。「僧侶が肉を食べている」などといった語りはよく聞かれることではあるが，比較的寄宿生活が長かった筆者は，僧侶が食事する時間帯にレストランにいたことがあまりなかった。また，正直なところ，人の食事を覗くことにとりたてて興味もないため，僧侶が何をレストランで食べているかまじまじと見たこともないことを付言しておく。

13) 遠藤は，真正性とは「創られたものであり，もしかすると『フェイク（偽造，模造）』なのかもしれない。だが人々のかかわりや社会関係のなかで本物だという意味づけをされているのなら，誰がそれを『偽り』だと言って切り捨てることができるだろう。それは，『オーセンティックなフェイク（本物の偽物）』ではないのか」と語っている〔遠藤 2007：113〕。

参考文献

アーリ，J. 1995 『観光のまなざし ―― 現代社会におけるレジャーと旅行』加太宏邦訳。法政大学出版局。

梅田英晴 2003 「ローカル，グローバル，もしくは「ちゃんぷるー」―― 沖縄観光における文化の多様性とその真正性をめぐる議論」『観光開発と文化 ―― 南からの問いかけ』橋本和也，佐藤幸男編。pp. 84－111。世界思想社。

遠藤英樹 2003 「観光のオーセンティシティをめぐる社会的理論の展開」『現代観光へのアプローチ』山上徹，堀野正人編。pp. 83－98。春風社。

遠藤英樹 2007 『ガイドブック的！観光社会学の歩き方』春風社。

神田孝治 2001 「観光，空間，文化 ―― 観光研究の空間・文化的転回へ向けて」『ツーリズムの文化研究』橋爪紳也，田中貴子編。pp. 27－70。京都精華大学創造研究所ライブラリー。

コーエン，E. 1998 「観光研究の現象学」遠藤英樹訳。『奈良県立商科大学研究科報』12（2）：103－129。

地球の歩き方編集部 2006 『インド』ダイヤモンド社。

橋本和也 1999 『観光人類学の戦略 ―― 文化の売り方・売られ方』世界思想社。

橋本和也 2003 「観光開発と文化研究」『観光開発と文化 ―― 南からの問いかけ』橋本和也，佐藤幸男編。pp. 54－83。世界思想社。

ブルーナー，E. 2007 『観光と文化 ―― 旅の民族誌』安村克己，遠藤英樹，堀野正人，寺岡伸吾，高岡文章，鈴木涼太郎訳。学文社。

ボードリヤール，J. 1984 『シミュラークルとシミュレーション』竹原あき子訳。法政大学出版局。

山本達也 2009 『伝統／現代を生きるディアスポラ ―― 北インド・ダラムサラ在住のチベット難民舞踊集団 TIPA を事例に』博士論文。京都大学大学院人間・環境学研究科。

吉見俊也 1996 「観光の誕生 ―― 疑似イベント論を超えて」『観光人類学』山下晋司編。pp. 24－34。新曜社。

Boorstin, D. 1962 *The Image : A Guide to Pseudo-events in America.* New York : Harper and Row.

Eco, U. 1986 *Travels in Hyper Reality.* San Diego : HBJ.

Lonely Planet 2007 *India.* London : Lonely Planet Publications.

MacCanell, D. 1973 "Staged Authenticity: Arrangements of Social Space in Tourist Settings." *American Journal of Sociology*, 79（3）: 589－603.

MacCanell, D. 2001 "Tourist Agency." *Tourist Studies*. 1（1）: 23－37.

Urry, J. 1992 "*The Tourist Gaze* Revisited." *American Behavioral Scientist*, 36（2）: 172－86.

Wang, N. 1999 "Rethinking Authenticity in Tourism Experience." *Annuals of Tourism Research*, 26（2）: 349－370.

閲覧ホームページ

インド国勢調査（2009年2月1日閲覧）

http: //www.censusindia.net/

Wikipedia（2009年2月1日閲覧）

http: //ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%80%E3%83%A9%E3%83%A0%E3%82%B7%E3%83%A3%E3%83%BC%E3%83%A9%E3%83%BC

Wiki Travel（2009年2月1日閲覧）

http: //wikitravel.org/ja/%E3%83%80%E3%83%A9%E3%83%A0%E3%82%B5%E3%83%A9

要　旨

本論は，チベット難民が多く居住する北インドのダラムサラに訪れる観光客に焦点を当て，そこで観光客たちが見せる，一筋縄ではいかない多彩な視点や反応に着目する。それらを通して，観光客という存在やそれを取りまいてきた研究の前提を問い直すことを目的とするものである。

ブーアスティンに始まり，マッカネルを経由してその議論が始まった1970年代以降，数々の理論的進展を成し遂げてきた観光社会学，観光人類学に代表される旧来の観光研究は，観光客という存在や彼らの実践を考える際に，特に「真正性」という観点を軸として考察を展開してきた。こういった研究は，観光客という存在を，「真正性を求める」「真正性に興味がない」というふうにアプリオリに定義し，その前提をもとに，こういった研究は議論を展開していった。

だが，観光客はこのように定義されるべきものなのであろうか。このように特定の視点を持ってのみ観光に臨むのであろうか。むしろ，観光客は多彩な視点を持って観光に臨んでいるし，また，現地での情報や出会いを通して，状況に応じて極めてアドホックに視点を変えていく存在なのではないだろうか。「真正性」を軸にしてアプリオリに定義された観光客像を持って議論を展開してきた旧来の諸研究は，その前提にはまらない観光客を捨象してしまい，また，現地で遭遇した出来事により「真正性」に対する視点を変更したり，その間で揺れ動くような状況が生じたりした観光客を考察することができていない。

こういった研究が保持しているのは，西洋近代が提示してきた，同一性を前提とした主体観ではないだろうか。こういった視点を保持するよりも，我々は，観光客をもっと開かれた視点から考察する必要があるだろう。本論が提示する事例は，旧来の研究がアプリオリに設定していた観光客という存在に再考を迫るものである。

キーワード：観光人類学，観光客，真正性，ダラムサラ，チベット難民

Summary

This paper explores different viewpoints and reactions from guests who visit at Dharamsala in North India where a vast majority of Tibetan refugee are living. Based on this case study, this paper reconsiders the premise of previous studies about "the guest".

Since the 1970's, numerous scholars have developed their studies of tourism on a certain premise of 'the authenticity.' They have treated "the guest" and "the tourist" as either "those who desires the authenticity in tourism" or "those who are indifferent to the authenticity in tourism." Those earlier studies therefore have regarded them simply as the premised categories.

However, I question the validity of such premises in previous studies, by asking if we can define them in advance, and if they actually enjoy a tour in such a simply perspective. This paper argues that guests and tourists approach their tourism with diverse interests and viewpoints. The tourists can change their perspectives when they learn some critical information or they come across someone who can significantly affect their thought on 'the authenticity.'

In essence, this case study criticizes the previous studies on the tourism and reconsiders their premise on guests and tourists.